

女教師

玲奈二十五歳

第六卷 女性教師の

過激なヌードポスター

海老沢 薫 著

## 内 容

■ ま え が き

■ 第 一 章 全 校 朝 礼 で 謝 罪 す る 女 教 師

■ 第 二 章 女 教 師 に 関 す る 屈 辱 の 投 票

■ 海 老 沢 薫 B L O G

■ 海 老 沢 薫 W e b 連 載 小 説

■ 著作権について

「女教師 玲奈二十五歳 第六巻 女性教師  
 の過激なヌードポスター」（以下本書と表記  
 する）の著作権は「海老沢薫」にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、  
 及び国際条約によつて保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもつて許可し  
 た場合を除き、本書の一部、または全部を、  
 あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファ  
 イル、ビデオ、テープレコーダー）により複  
 製、流用、転載、転売することを固く禁じま  
 す。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第  
 61条などの罰則がありますのでご注意くださ  
 い。

■ まえがき

水泳大会でプールの中を一糸纏わぬ姿で泳ぎ、教師としてあるまじき痴態の限りを披露した女教師、秋山玲奈は、お局教師、児玉の指示によって全校朝礼で生徒達に謝罪させられる事になった。

児玉に弱みを握られ逆らうことのできない玲奈は、児玉らが作成した屈辱の謝罪文を無理矢理暗記させられ、朝礼台の上で羞恥に震えながら暗記した謝罪の言葉を全校生徒に向けて伝えた。

「先日の水泳大会で、私、秋山玲奈は教師であるにも関わらず、自分の、ろ、露出願望を満たすために、プールの中でスッポンポンになり、生徒の皆さんに・・・オ、オッパイや・・・陰毛、お尻、肛門などを見せびらかしてしまい、本当にごめんなさい・・・」

屈辱の謝罪の言葉を並べる美人女教師を驚いた表情で眺める生徒達。

しかし、玲奈の謝罪はまだこれで終わりではなかった。  
「それに、私はみんなに裸を見られて気持ち良くなつてしまい・・・学校のプールの中であるにも関わらず・・・おもいきり、イ、イってしまいました・・・」  
「女子生徒の皆さんは、どうか私のように人前でイク・・・ド、ド淫乱な大人の女にだけはならないでくださいね・・・」  
児玉らが作成した謝罪文に記された文言を、一言一句間違わずに喋る玲奈。  
そして、朝礼台の上で羞恥に喘ぐ美人女教師は、最後に衝撃のセリフを放った。  
「私、秋山玲奈は教師として恥ずべき行為をしたため、どんな罰でも甘んじて受けるつもりです・・・つきましては、生徒の皆さんが望む罰を受けたいと思いますので、私にどんな罰を与えたいかを紙に書いて生徒会の投票箱に投票してください」

それ、児玉らが考えたセリフに他ならず、  
全校生徒は玲奈の発言にすっかり興奮し、美  
人女教師にどんな罰を与えるか、早速それぞ  
れの欲望のままに考え始めるのだった。  
それから一週間後、全校生徒による投票は  
締め切られ、女教師に与える罰がついに全校  
朝礼の場で発表されることになった。  
朝礼台の上に立った児玉が屈辱の罰を告げ  
ると、全校生徒の間から大きなどよめきが起  
こり、その後に割れんばかりの拍手が校庭に  
鳴り響いた。  
罰を受ける当事者の玲奈は、あまりに過激  
な罰の内容に動揺を隠しきれない様子で、羞  
恥と恐怖に全身を小刻みに震わせていた。  
そして、破廉恥な女教師を更生させるため  
という大義の下に、いよいよ過激な罰が執行  
される事になり・・・。

■ 第一章 全校朝礼で謝罪する女教師

水泳大会が終わってから数日後の朝、玲奈はいつにも増して緊張した面持ちで全校朝礼の行われる校庭へと向かっていた。近くを通り過ぎていく生徒達は皆、美人女教師の体を服の上から舐め回すように眺め、意味深な笑みを浮かべていた。ああん、お願い、そんな目で私を見ないで・・・玲奈は自分を見つめる生徒達の目が欲情に満ち溢れ、水泳大会の日に見た自分の裸を頭の中でフラッシュバックしているのだと分かると、どうしようもない羞恥に襲われた。

あの日から校舎内の何処を歩いても、生徒達の厭らしい視線が体中に突き刺さるのを感じ、玲奈は知らないうちに秘部を恥ずかしいほど濡らしていた。学校のプールを素っ裸で泳ぎ、全校生徒の前で絶頂シーンまで晒してしまった女教師は、もはや教師としての

威厳を生徒達に示すことができるはずもなく、ある種の性玩具として学校生活を送るしかなかった、

「秋山先生、今日は宜しくお願いしますね」

校庭へと向かう玲奈の背後から声を掛けてきたのは、お局教師の児玉だった。

「は、はい・・・」

玲奈は思わず立ち止まると、恐縮した様子で児玉に返事をした。

実は、今朝の全校朝礼で玲奈は先日の水泳大会で見せた一連の破廉恥極まりない行為について、全校生徒に謝罪することになっていったのだ。発端は昨日の放課後に開かれた臨時の教員会議であつた。お局教師の児玉は、玲奈が校内の水泳大会で素っ裸になつた挙句、生徒達の前で絶頂した問題について強く言及し、他の教員達からも様々な意見が交わされた結果、とりあえず全校生徒の前で玲奈自らが謝罪し、教師としてのけじめを付ける事に決まつたのだつた。

そして玲奈は、自らの弱みを握られている  
児玉、田村、沢井の三人の同僚教師から陰で  
脅され、今朝の全校朝礼では彼らが考えた謝  
罪のセリフを全校生徒の前で告げなければな  
らなかったのだ。今朝、職員室で謝罪文の原  
稿を渡された玲奈は、そこに記された文面を  
読み、あまりに屈辱的な内容に体の震えが止  
まらなかった。こんなことを全校生徒の前で  
言わせるなんて、酷すぎるわ。・・。玲奈は  
すぐに児玉に抗議したが、嫌なら放課後の校  
庭を素っ裸で走っている動画をネットで拡散  
すると脅され、やむを得ず渡された謝罪文の  
文面を急いで丸暗記したのだった。  
校庭には全校生徒が整然と並び立ち、遅れ  
て現れた美人女教師の方を意味深な笑みを浮  
かべ眺めていた。ああん、やつぱり恥ずかし  
いわ。・・。校庭の隅に立った玲奈は、全校  
生徒の視線が自分に集中しているのが分かる  
と、すっかり怖じ気づいてしまった。

「秋山先生、謝罪文を読む時にはちゃんと全校生徒に顔を見せて、はつきりとした口調で喋るのよ。もし、ちゃんとやらなかったら、どうなるか分かっているわね」

児玉は怯える玲奈の元に近づくと、改めて脅しを掛けた。

「わ、分かりました・・・」

お局教師に念を押された玲奈は震える声で頷き、緊張した面持ちでその時を待った。

そうして、全校朝礼は始まり、いつものように朝礼台の上で教頭が話し始めると、校庭に立つ生徒達は退屈するような面持ちで美人女教師の方だけを見つめていた。

「えー、それではここで、先日の水泳大会において、破廉恥極まりない行為をした秋山先生の方から、生徒諸君に謝罪をしてもらいます」

教頭は講話の最後にそう告げると、校庭の隅に立つ玲奈に目で合図を送った。

あぁん、どうしよう・・・。玲奈はこれからここで自分の恥辱ショーが始まるのかと思うと、恥ずかしくて堪らなかった。」「さぁ、秋山先生、早くこっちに来なさい！玲奈がいつまでもモジモジと立ち尽くしていと、教頭はマイク越しに注意した。」「は、はい・・・」

教頭の声が校庭に響き渡ると、玲奈は慌てて朝礼台の方に歩いた。

「玲奈ちゃん、水泳大会でスッポンポンになつたことを謝るって、なんだか面白そうだな。一体どんな顔して謝るんだろ」

「秋山先生、水泳大会であんな恥ずかしいマネしておいて、よくウチらの前に立てるよね。まったくどういう神経してるのかしら」

玲奈が朝礼台へ向かう途中、校庭には生徒達の様々な囁き声が聞こえた。

水泳大会で破廉恥極まりない姿を晒した女教師のことを、生徒達は皆、性奴隷を見るような目で眺め、これから行われる玲奈の謝罪

劇に邪な期待を寄せた。玲奈に謝罪文を渡し、  
た児玉達は、美人女教師が再び全校生徒の前  
で恥辱に塗れ、羞恥に喘ぐ姿を予見し、必死  
に笑いを堪えている姿が見えた。  
朝礼台の前にやって来た玲奈は、教頭と入  
れ替わる形で朝礼台の上に昇り、脚をガクガ  
ク震わせながらマイクスタンドの前に立った。  
「皆さん、お、おはようございます。・・」  
玲奈が震える声で挨拶をすると、生徒達は面  
白い見世物でも見るかのように、ギラギラし  
た視線を女教師に向けた。  
「玲奈ちゃん、脚をあんなに震わせちゃって  
かわいー」  
「玲奈ちゃんのあの恥ずかしそうな顔、たま  
んねえ」  
「何よあれえ、教師のくせにビクビクして、  
みつともない」  
「水泳大会でウチらに散々裸を見せておいて  
今さら清純ぶらないで欲しいわ」

玲奈が羞恥に怯えていることは誰の目から見ても明らかで、生徒達はそんな女教師の姿に加虐心を駆り立てられた様子だった。

朝礼台の上に立つ玲奈は、全校生徒から放たれる淫靡な欲望の渦を全身に感じながら、さつき暗記したばかりの謝罪の言葉をマイクに向かって唱え始めた。

「先日の水泳大会で、私、秋山玲奈は教師であるにも関わらず、自分の、ろ、露出願望を満たすために、プールの中でスッポンポンになり、生徒の皆さんに・・・オ、オッパイや・・・陰毛、お尻、肛門などを見せびらかしてしまい、本当にごめんなさい・・・」

玲奈はそこまで告げると、一度間を置き高鳴る心臓の鼓動を鎮めようとした。

生徒達は、女教師の謝罪を一言一句聞き逃さないよう全力で耳を傾け、その羞恥に咽ぶ姿を楽しんだ。

「私の裸を見て不快な思いをした生徒の皆さんには・・・心からお詫び致します」

玲奈はそう言うと、朝礼台の上で深々と頭を下げた。  
「玲奈ちゃん、別に謝らなくていいぞ！俺達に先生の綺麗な裸を見せてくれて逆にありがとう！」  
「そうだ！俺達、水泳大会で見た先生の裸、一生忘れねえからな！玲奈ちゃんは俺達の永遠のアイドルだ！」  
校庭に一部の男子生徒達が玲奈を励ます叫び声が響き渡り、朝礼台の上で頭を下げている女教師はなんと複雑な気持ちになった。  
みんな、私の裸をしつかりと頭に刻み込んでいるのね・・・。男子生徒達が一生教師である自分の裸を思い出しながら性のオカズにするのかと思うと、玲奈は居たたまれない気持ちになった。  
「秋山先生、謝罪はまだ終わってないでしょ早く続けなさい」

玲奈が朝礼台の上でいつまでも頭を下げ続け  
ていると、児玉が近づき小さな声で玲奈に呼  
び掛けた。  
「はい・・」  
玲奈は顔を上げると、児玉に向かって小さく  
頷き、息を整えてから残りのセリフを続けた。  
今朝、児玉が渡した謝罪文のまだ半分程度  
のセリフしか玲奈は喋っていないかったのだ。  
「それに、私はみんなに裸を見られて気持ち  
良くなってしまう・・学校のプールの中で  
あるにも関わらず・・おもいきり、イ、イ  
ってしまいました・・」  
玲奈はそこまで言うとき軽い目眩を覚え、俯  
いてしまった。  
「ヤダあ、教師がわざわざあんなこと言う？  
信じられない」  
「あれじゃあ、自分が露出狂のド変態だって  
認めているようなもんじゃん」

女教師の発言を聞いた女子生徒達は、皆一様に不快感を露わにして、近くにいるクラスメイトと共に玲奈を罵った。  
「ああん、そんな怖い顔しないで・・・。朝礼台の上から生徒達を見下ろしている玲奈は至る所から女子生徒達の鋭い視線が自分に向けられているのが分かり、恐怖に怯えた。それでも、傍にいろ児玉の存在が気になった玲奈は、暗記した謝罪の言葉を必死に唱えていった。  
「女子生徒の皆さんは、どうか私のように人前でイク・・・ド、ド淫乱な大人の女にだけはならないでくださいね・・・」  
玲奈はそこまで言うのと、女子生徒達の方に向かって引きつった笑みを浮かべたのだった。  
「キャッー。秋山先生笑ってるう、信じられない！」  
「あんなこと言って笑うなんて、本物のド淫乱女ね！」

女子生徒達は、笑顔を見せた女教師に憤りを抑えきれない様子で、校庭は俄にざわついた。朝礼台の上からそんな彼女達の様子を見た玲奈は、何ともやるせない気持ちになった。実は、女子生徒達に向かって引きつった笑みを浮かべたのも児玉達からの命令で、渡された謝罪文にト書きとして『女子生徒達に微笑みかける』と記されていたのだ。

児玉からの指示通りに全校生徒に向かって謝罪する玲奈は、脚をガクガク震わせながらついに謝罪文の最後に記されていた屈辱のセリフを唱えた。

「私、秋山玲奈は教師として恥ずべき行為をしたため、どんな罰でも甘んじて受けるつもりです・・・つきましては、生徒の皆さんが望む罰を受けたいと思いますので、私にどんな罰を与えたいかを紙に書いて生徒会の投票箱に投票してください」

玲奈は謝罪文に記されていていたセリフを全て言  
い終えるとガツクリと項垂れ、その様子を見  
た生徒達は目をギラギラと輝かせるのだった

## ■ 第二章 女教師に関する屈辱の投票

美人女教師が朝礼台の上で衝撃的な謝罪の言葉を伝え終わると、傍に立っていたお局教師の児玉が朝礼台上がり、全校生徒に向かって玲奈の発言の補足説明をした。それによれば、全校生徒一人一人が玲奈に与えたい罰の内容を紙に詳細に書き記し、学年と氏名を記入の上、その紙を生徒会選挙などで使う専用の投票箱に今週中に投票する。そして、児玉達が責任を持って集計を行い、投票の多かっただのものの中から児玉達が最も妥当だと思う罰を選んで玲奈に与えるという事であった。児玉の説明を聞いた生徒達は、思いがけぬ刺激的な展開に驚き、男子生徒も女子生徒も興奮した表情を浮かべた。

「おいおいマジかよ。ホントに俺達が玲奈ちゃんに与える罰を決めて良いのか？」

「それなら、おもいつきエロい罰を与えて  
 やろうぜ（笑）」  
 「そうだなあ、全校朝礼の時に朝礼台の上に  
 全裸で座って、脚をおもいつき開いてオ○  
 ニーしてもらってのはどうだ」  
 「いいねえ、俺達全員それにしようぜ」  
 男子生徒達は頭の中でHな妄想を膨らませなが  
 らが、勝手に盛り上がっていた。  
 「なんだか面白い展開になってきたね。どう  
 せなら秋山先生に徹底的に恥を掻かせてやろ  
 うよ」  
 「そうだね、せっかくだからこれから毎朝裸  
 で登校してもらうってのはどう？」  
 「キャッ、過激すぎい！それしたら秋山先生、  
 警察に捕まっちゃうよ（笑）」  
 女子生徒達の発想は男子生徒達よりもさらに  
 過激で、美人女教師の尊厳そのものを完全に  
 破壊するようなものであった。  
 玲奈は、生徒達が自分に与える罰について

うしようもない恐怖と失望に襲われ、朝礼台の上で全身を小刻みに震わせた。  
「秋山先生、生徒達がどんな罰を考えてくれるのか楽しみね（笑）」  
玲奈の耳元でそう囁きかけた児玉は、自分の思い描いた通りの展開に満足そうな表情を浮かべた。  
それから、校内は美人女教師に与える罰の話題一色で覆われることになった。教室で授業を受けている時や廊下を歩いている時、部活をしている時、登下校の時と生徒達は破廉恥な女教師に与える罰について語り合い、盛り上がり上がった。そうして、職員室の入口近くに設置された専用の投票箱には次第に生徒達一人一人が書いた投票用紙が投函され始めたのだ。  
「秋山先生、生徒達の投票用紙が沢山集まってきたているわよ（笑）」  
「かなり過激な内容の罰ばかりで、どれを選べばいいか迷うな（笑）」

「最近の高校生は本当に何を考えているのか  
分からなくて恐いですね（笑）」  
投票の集計を担当し、玲奈の弱みも握るお局  
教師の児玉、生活指導部長の田村、若手男性  
教師の沢井の三人はそう言って玲奈を精神的  
にいたぶった。  
実際、投票された紙を集計のために随時開  
封し中身を確認している児玉達は、そこに記  
されたあまりにおぞましい罰に驚いていた。  
『最寄り駅から全裸で登下校させる』  
『文化祭の時に大観衆の集まった講堂のステ  
ージ上で全裸で排便させる』  
『全校生徒全員の席を全裸で回り、体を自由  
に触らせる』  
『男子に毎日元気を与えるために校内の至る  
所に秋山先生の裸のポスターを貼る』  
生徒達の投票用紙にはそうした罰が記載され  
そのどれもが女教師の尊厳を著しく踏みにじ  
るものばかりであった。

児玉は自分達の想像を遙かに越える生徒達の斬新な発想に驚くと共に、胸の奥から湧き上がる興奮を抑えきれずにいた。これは面白いことになりそうだわ・・。児玉は心の中でほくそ笑みながら、最終的な罰を決める時を楽しみに待ち侘びた。

玲奈が全校生徒の前で衝撃の謝罪をしてから数日後、全校生徒全員が女教師に与える罰について投票を終わ、ついに最終的な集計をする時が訪れた。担当の児玉、田村、沢井の三人は放課後の会議室に集まり、生徒達が書いた投票用紙を一枚一枚入念に確認していた。

「ホント、どれも過激なものばかりね。これじゃあ秋山先生捕まっちゃうわよ（笑）」

「生徒達はみんな、秋山先生の事をもうただの玩具のようになんか思っていないんだな（笑）」

「こんな酷い罰ばかりじゃ、まったくどれを選べば良いのか困りますね（笑）」

児玉達は、生徒達が考えた過激な罰を面白そうに読みながら笑い合った。

そうして、集計作業は夜にまで及び、児玉達三人はどの罰を選ぶか慎重に協議を重ねた。玲奈を徹底的に辱めたくても、あまりに過激な罰だと警察沙汰になったり、マスコミにリクされるなどして学園全体の大きな問題になる恐れがあった。そのため、児玉達はギリギリの線を狙って熟慮を重ね、ついに二つの罰を選んだのだった。

「これで決まりね。秋山先生にはこの二つの罰を受けてもらうことにしましたよ」

「そうですね、これなら何とかいけそうですね」

「秋山先生が生徒達の考えた卑猥な罰を受けると思うと、なんだかワクワクしますね」

玲奈に与える罰を決定した三人の教師達は満足そうな表情で、罰を受ける玲奈の姿を想像していた。

全校朝礼がまもなく始まろうとする校庭では、全校生徒がいつになくざわつき、異様な熱気に包まれていた。

「今朝の全校朝礼で玲奈ちゃんに与える罰が発表されるらしいぜ」

「一体どんな罰に決まったんだろうな。俺の書いた文化祭でストリップショーさせるだつたらいいのになあ」

「バカ、児玉達が決めるんだから、そんな罰になるわけねえだろ。でも、なるべく過激なヤツであることを願うぜ」

「ねえねえ、秋山先生に与える罰って何に決まったんだろ。どうせなら滅茶苦茶恥ずかしいのがいいんだけど」

「そうだね、あんなド変態教師には重い罰を与えて懲らしめてやらないとね」

「どんな罰になったのか楽しみたい」

男子生徒も女子生徒も、今朝の朝礼で玲奈に与える罰が発表されるとあつて、興奮して待ちきれない様子だった。

校庭の隅に立つ玲奈は、そんな生徒達の姿を見て居たたまれないといった感じで、先週の全校朝礼の時と同じように体を小刻みに震わせていた。決定した罰の内容は児玉達三人の教師以外は誰も知らされておらず、玲奈は自分が一体どんな罰を受けるのかまったく分からなかった。

「秋山先生、顔色悪いけど大丈夫？」

怯える玲奈に声を掛けてきたのは、罰を決定した児玉であつた。

「児玉先生、私どんな罰を受けるんでしょうか・・・？」

自分がどんな目に遭うのか気になつて仕方ない玲奈は、思わず児玉に詰め寄つた。

「それは、この後のお楽しみじゃない。それにしても生徒達はみんな、アナタのことを奴隷だと思つているみたいよ（笑）」

児玉がそう言つて満面の笑みを浮かべると、玲奈は恐怖に顔を引きつらせた。

そうして、全校朝礼の時間となり、いつものように教頭が朝礼台の上で講話を始めた。校庭の隅に立つ玲奈は、まるで裁判の判決を待つ被告のような気分で教頭の話を上の方で聞いていた。――えー、それではこの後は児玉先生の方から先日皆さんに投票してもらった秋山先生に与える罰についての結果報告をしていただきます。――教頭がそう告げると、全校生徒は一瞬ざわついた後、朝礼谷に立った児玉の言葉に耳を傾けた。――皆さん、先日は秋山先生たってのお願いで先生に与える罰について投票してくれて本当にありがとうございます。皆さんの投票用紙については生活指導部長の田村先生、それから沢井先生そして私の三人でしっかりと確認をさせてもらいました。――児玉はそこまで言うと、生徒達に向かって不敵な笑みを浮かべた。

「皆さんの大変ユニークな発想には私達も正直驚かされました。そして、皆さんの考えた罰の中で多かったもののなかから、私達が妥当だと思うもの、秋山先生の反省を促すためにふさわしいと思うものを二つ選ばせてもらいました」

児玉がそう告げると、校庭の隅で聞いていた玲奈は顔面蒼白となった。なぜなら、てつきり罰は一つだけだと思っていたのに、二つも罰を受けなければならぬことが分かったかっらだった。そして、生徒達は女教師の罰が二つあることが分かった、さらに興奮している様子が見てとれた。

校庭が全校生徒の熱気に包まれる中、朝礼台の上に立つ児玉は不敵な笑みを浮かべたまま、手に持った紙に記された罰の内容を愈々読み上げようとしていた。

■ 海老沢薫 B L O G

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 国民のペットへと堕ちていくヒロイン ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 女神の憂鬱 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 ー 女性教諭の前代未聞の不幸事 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 ー 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>